

リハビリテーション学専攻3期生の思い出

西九州大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 仙波 梨沙

西九州大学大学院生活支援科学研究科リハビリテーション学専攻が設立10周年を迎えられましたことに、心よりお祝い申し上げます。

私が西九州大学の大学院に入学したのは、今から7年前でした。専門学校を卒業後、ずっと大学院に行きたいとの思いはありましたが、子どもがまだ小さかったこともあり実現できずにいました。しかし職場の同僚が大学院に行くようになり、その思いは諦めきれず、ますます強くなり、何度も夫と両親に大学院に行きたいことを伝えました。両親は賛成してくれたのですが、夫は自分の負担が大きくなるのが分かっていたのでずっと反対しておりました。しかし、しつこく繰り返し説得を試みると、初めは大反対だった夫も根負けして「そこまで行きたいなら行けばいい」と何とか了承してくれました。その時、大喜びしたことを今でも覚えています。後日談ですが、「本当は行ってほしくなかったけれどあまりにも思いが強すぎて、これを行かせなかったら一生根に持たれると思ったから」と夫は申しておりました。

大学院入学時、上の子が5歳、下の子が3歳、職場では後輩の育成指導を任せられ、公私ともにあわただしい毎日を過ごしており、さらに大学院生活が始まり、多分、人生で一番忙しい時期だったと思います。その当時は自動車で1時間近くかかるところに職場があり、朝7時には家を出て、17時半の業務終了後、18時からの大学院の授業を受けるためにあわてて大学へ向かい、講義終了後、家にたどり着くのは21を過ぎていました。子どもの寝顔しか見られない日もあり、子どもたちや夫に申し訳ない気持ちになることも多々ありました。夫や両親、子どもたちの協力があったからこそできたことだと思います。忙しくはありましたが、それが苦痛という思いはあまりなく、むしろ授業を受ける新鮮さ、研究のおもしろさ、同じ院生の仲間とのディスカッションやイベント等で非常に充実した毎日でした。

同じ大学院生仲間にも恵まれたのも幸運でした。職種も年齢も性格も環境もそれぞれ違っていました。みんな切磋琢磨し励ましあい、2年間を過ごすことができました。6号館の大学院生室に行くといつも誰かいて「自分一人じゃない」と勇気づけられていました。大学院生仲間のおかげでドロップアウトせずに済んだと言っても過言ではありません。同期の皆さま、2期生、4期生の皆さまにはこの場を借りて御礼申し上げます。

大学院では軽度認知障害（Mild Cognitive Impairment：MCI）と手段の日常生活活動（Instrumental Activities of Daily Living：IADL）の関連について研究をしておりました。認知機能の低下が起こってくると、IADLに影響があること、とりわけその前段階として「財布に小銭がたまる」という傾向は認知機能の低下を予測できるのではないかと研究を進める中で、自分の財布に小銭がたまることに敏感になったことを思い出します。今でも自分の財布に小銭がたまってくると心配になります。

地域の測定に参加するようになり、学部生とも顔見知りになることができました。学部の3期生とは卒業が同じで、謝恩会で大いに盛り上がったことはいい思い出です。卒業後も縁があり研究だけでなく、作業療法士として縦のつながりや横のつながりが増えたことも大学院で習得できたことでした。

あまり出来のいい大学院生ではなかったもので、指導教員であった上城憲司教授にはたいへんご迷惑をおかけしたと思います。今更ながら謝罪したい思いと、最後までご指導いただいたことに心より感謝申し上げます。

今年の4月から、自分が切磋琢磨した西九州大学で今度は教員として母校の教壇に立つことができ、感慨深いものがあります。あの頃、講義やご指導いただき雲の上の存在と尊敬していた先生方と一緒に働くことができるというのは、光栄ではありますが恐れ多いとも感じております。諸先生方にご迷惑をおかけしないよう日々精進しなければならぬと焦燥感に駆られております。

最後になりましたが、今回このような機会を設けていただきました宮原洋八教授に拝謝申し上げます。